

<b>Title</b>	モルトマン (J.Moltmann)の靈性神学
<b>Author(s)</b>	金, 明容 高, 萬松・訳
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.55, 2013.3 : 311-343
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4679">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4679</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## モルトマン (J. Moltmann) の靈性神学

金 明 容  
高 萬 松・ 訳

### 《訳者解説》

近年、韓国ではモルトマン神学に対する関心が高まる傾向がある。本紀要五一号の洛雲海「韓国の神学について——ユルゲン・モルトマンとの関わりから」に詳細に論じられている。<sup>①</sup>

聖学院大学はソウルの長老会神学大学校と提携関係を結んでいる。長老会神学大学校では二〇〇〇年以降モルトマン研究が盛んである。その組織神学・申玉秀（シン・オクス）教授は、本論文の著者、金明容（キム・ミョンヨン）教授は、大韓イエス教長老会（統合派）の代表的組織神学者としてバルトの専門家であり、モルトマン神学を韓国の教会と神学界に紹介し、批判的に継承しようとしている、という。<sup>②</sup>

実際、長老会神学大学校が発行している『長神論壇』という紀要には二〇〇〇年以降、次のような主題の論文が収録されている（いずれも、著者は金明容教授）。すなわち、「モルトマンの万有救済論と救済論の新しい地平」（二〇〇〇年）、「モルトマンの三位一体論」（二〇〇一年、本紀要五五号）、「モルトマンの靈性神

学」(二〇〇二年、本論文)、「モルトマン神学の貢献と論争点」(二〇〇三年、本紀要五四号)、「モルトマンの終末論」(二〇〇四年、本紀要五二号)などである。

本紀要五四号に収録されているように、金明容教授はモルトマン神学の貢献と論争点を以下のように要約している。すなわち、「歴史責任的神学としての政治神学と平和神学、生と命のためのメシア的神学、生態学的宇宙的神学、理解可能な三位一体論と三位一体神学の実践性、そして終末論の新しい地平と万有救済論」である。<sup>(3)</sup>今回は金明容教授の論文「モルトマン(J. Molmann)の靈性神学」を、著者の許諾の下で翻訳した。<sup>(4)</sup>この論文から韓国神学界におけるモルトマン神学の理解を深めたいと思う。著者はここでモルトマンの靈性神学が、かつての靈性神学が持っていた歪曲された脱社会性や歴史性という問題点を矯正し、二一世紀のための正しい靈性神学の道を開いたと評価し、肯定的に受容している。

## 注

- (1) 洛雲海「韓国の神学について——ユルゲン・モルトマンとの関わりから」『聖学院大学総合研究所紀要』五一号、二〇一二年、六一—八四頁。
- (2) 申玉秀「韓国におけるモルトマン受容とその理解」、洛雲海訳、『聖学院大学総合研究所紀要』、本号、八二—一三頁。
- (3) 金明容「モルトマン(J. Molmann)神学の貢献と論争点」、高萬松訳、『聖学院大学総合研究所紀要』五四号、二〇一二年、二四二—二六六頁。

---

(4) 金明容「モルトマン(J. Moltmann)の靈性神学」、『長神論壇』第一八集、二〇〇二年。この論文におけるモルトマンの著作からの引用文は原文に忠実にするために韓国語からの訳に準ずる。しかし、和書のある長い引用箇所に限っては、和書の対応箇所から引用した。

---

## 序

モルトマンの靈性神学は、靈性に対する伝統的キリスト教理解を根本的に変えるような驚くべき内容を持つ神学である。モルトマンは一九九一年『いのちの御霊』(Der Geist des Lebens)<sup>(1)</sup>と一九九七年『いのちの泉』(Die Quelle des Lebens)<sup>(2)</sup>を出版し、自分の靈性神学の特徴を明らかにしている。それらは驚くべき、新しい靈性神学であった。しかしモルトマンのこの驚くべき新しい靈性神学は聖靈論の大きな枠組において体系化した靈性神学であるので、彼の靈性神学の理解のためには彼の聖靈論の核心的内容が先に叙述されるべきである。モルトマンは聖靈をいのちの霊と規定し、キリスト教の真の靈性は生と生命のための靈性であると見なしている。それではモルトマンの言ういのちの霊としての聖靈はどういうお方であり、生と生命のための靈性とは何であろうか。

## I モルトマンの聖霊論

### 一、統全的聖霊論

モルトマンは一九九一年『いのちの御霊』(Der Geist des Lebens)を出版し、そこで統全的聖霊論(Eine ganzheitliche Pneumatologie)という副題を付けている。この統全的聖霊論という副題はモルトマンの聖霊論の特徴を表している。モルトマンの言う統全的聖霊論はかつての聖霊論と較べ大きな特徴がある。モルトマンは聖霊の活動と経験を教会の宗教的活動と人間の靈魂の領域に縮小させたかつての聖霊論を不完全なものとしている。モルトマンは次のように言った。<sup>(3)</sup>

カトリック神学は無論のことプロテスタント神学に至るまで、そして彼らの敬虔に対する理解によれば、聖霊を単なる救いの霊と捕らえ、その場所は教会であり、聖霊は人間に靈魂の永遠の祝福を拡げると見なす傾向がある。この救済する霊は人間の身体的生は無論、自然的生から分離する。救済する霊は人間がこの世界から背を向けてより良い彼岸の生を期待させる。そうであるなら、キリストの霊において旧約聖書が表している神の生の力、すなわち、全ての生き物に滲みる能力とは異なる能力があると考えざるを得ない。したがって神学の諸書は聖霊を神と信仰とキリスト教的生と教会と祈りとに関連づけて取り扱い、肉体と自然と

に関連づけて扱うことは珍しい。

モルトマンの批判によれば、伝統的に聖霊は生と生命のための霊であつたのではなく、人間と教会の宗教的敬虔と霊魂の救いのための霊であつた。カトリック神学者コンガール (Y. Congar) の膨大な聖霊論に関する著述も、モルトマンの批判によれば神の霊は「単に教会の信仰の霊であるような」<sup>(5)</sup> 印象を与えている。モルトマンによれば聖霊は単に人間と教会の宗教的敬虔と霊魂救済のための霊ではなく、人間の肉体も生かし、社会と歴史も生かし、また創造世界全体を生かしている生と生命の霊である。今日の生態学的神学は自然と肉体の重要性を発見したし、宇宙的キリスト論は宇宙的聖霊論に行く道を開いた。統全的聖霊論とは、聖霊の活動と経験の領域を人間の靈魂に制限させず肉体を含んだ全体としての人間の生に拡大させた聖霊論であり、教会や個人的で宗教的な靈性生活のみが聖霊の経験の場ではなく、社会と歴史を含んだ全体の世が聖霊の経験の場であり、人間の生と歴史だけではなく全ての創造世界が聖霊の救いの働きと関わっていると見なす聖霊論である。モルトマンによれば聖霊の体験と聖霊による救いは人間の宗教的体験だけではなく、生を生かし救済する生の喜びと生動力 (Vitalität) と関わっている。モルトマンは次のように統全的聖霊論のための自分の聖霊論の序文で統全的聖霊論が何であるかを易しく説明している。<sup>(6)</sup>

あなたはいつ最後に「聖霊」の働きを体験しましたか。この簡単な質問は我々を当惑させる。聖霊の聖性について聞くとき、我々は宗教的に畏れている。聖霊は我々の世俗的生から分離されており、我々は神から遠く離れていると感じる。宗教的体験も、我々が知っているように全ての人が持つことのできる体験ではない。

しかし、あなたはいつ最後に「生の霊」を体験しましたか、という質問は全然違うように聞こえる。この

質問に対して我々は我々自身の日常的な生の経験をもって答えることができ、我々の経験した慰めと勇氣について語ることができる。このとき「靈」は我々を喜ばせる生の楽しさを意味し、靈の諸力は我々の内でその楽しさを惹き起こす生の諸力である。

モルトマンによれば聖靈は我々の生を完全に、「生動的に」<sup>(7)</sup>、生命の喜びで満たす靈である。「聖靈は靈魂を肉体から分離させず、それをこの地から天に急ぎで行かせない。むしろ聖靈は地上の全人的人間を新しい地の夜明けの中に立たせる。……復活のキリストとの交わりにおいて新しい創造の靈を経験する者は死滅、病、抑圧した彼の体が『蘇られる』ことを既にここで経験する」<sup>(8)</sup>。モルトマンによれば聖靈は人間を完全なものとする靈である。病者は完全ではない。精神的に傷ついた者たちは完全ではなく、喜びを喪失し生の勇氣を失っている者たちも完全ではない。モルトマンによれば真の聖性は人間と世と創造世界全体の完全性と関連がある。聖なる聖靈は精神的に、肉体的に傷つけられた者たちを生かし完全にする。生の聖性は「生の宗教的、意図的調整 (Manipulation) を意味するのではなく、生を肯定し、解放し、義とすること、そして愛されて生命を豊かに生かすことを意味する」<sup>(9)</sup>。聖靈は生に対する情熱を引き起こし、死の力に対抗させる。モルトマンによれば真の聖性は死の力に対抗する力であり、自分と隣人と世の生を肯定し愛する情熱である。世を愛し世を生かすために苦難の道を歩んだボン・ヘッファー (D. Bonhoeffer) の生はモルトマンによれば真の聖なる生である。それゆえモルトマンはボン・ヘッファーを今日の殉教者と称している。<sup>(10)</sup>モルトマンは聖なる靈の経験を次のように要約している。<sup>(11)</sup>

「聖なる靈」は生を完全にさせる靈であり、彼は彼の被造物の生に対する創造者の情熱を持ち、生を破壊しようとする諸力に対する憤りと共に生を完全にする。滅亡の崖つぶちで再生と創造の保持は互いに違うもの

ではなく、聖なる霊は生かす霊と経験される。

モルトマンの統全的聖霊論は聖霊を生と生命の霊と理解しようとする聖霊論である。かつての聖霊論が宗教的霊性と教会の宗教的活動のための聖霊論であったとすれば、モルトマンの統全的聖霊論は人間の霊魂と教会の垣を超えて、人間の肉体と世と全ての創造世界の救いと聖化のための聖霊論である。

## 二、生と生命の霊としての聖霊

### (一) 生と生命の力としての聖霊

モルトマンにとって聖霊は生と生命の力の源泉である。モルトマンは自分の聖霊論の本の名前を『いのちの御霊』(Der Geist des Lebens)と呼び、このにおいて「いのち」と訳されたドイツ語「レーベン」(Leben)は「生」と翻訳できる単語である。ドイツ語の「レーベン」は「生」と「生命」の両者の意味を持っているので、モルトマンの聖霊論の書名は生の霊、あるいは、生命の霊と訳すことができ、この両者の意味を持つ本である。すなわち、モルトマンは人間と世に生と生命を与え、また豊かに与えている霊が聖霊であると自分の聖霊論において言っている。

伝統的に教会は聖霊を再生と聖化の霊と規定し、これを強調した。聖霊は人間の霊魂を再生させ、またこの霊魂を霊的に聖なるものとする霊だということである。しかしモルトマンによればこのような伝統的な聖霊論に対する理解は、聖霊の活動を人間の宗教的領域の中に閉じ込める間違いを犯す。モルトマンによれば聖霊は、人間と世の生の根源であ

り、エネルギーの源泉である。

モルトマンは次のように言っている<sup>(12)</sup>。

カリスマ的傾向において神の霊は生動のエネルギーとして経験される。幸せとならしめる神の親密さにおいて生は生動し始める。我々は神の能力の場において自分自身を経験する。したがってカリスマは力動性(dynamis)あるいはエネルギー(energia)と表現できる。聖霊がカリスマ的に経験される仕方は古くから「流れる」、「注がれる」、「輝く」などで描写されている。このような経験から推察するとき、聖霊は「生の源泉」(Quelle des Lebens)として、「エネルギーの流れの根源」(Ursprung des Energielusses)として、また輝く光のための「光の源泉」(Lichtquelle)として理解できる。ここで表されている表現は流出説的表現である。

モルトマンによれば聖霊の経験は幸せの経験であり、生の経験であり、生動力と能力の経験であり、輝いている世界と歴史の経験である。聖霊から流れてくる聖霊の力は、病者を生かし、破かれた共同体を回復し、死んでいく自然を生かし、死の力がそれ以上活動できない世を作る。聖霊から流れてくる生命の水は人間と自然と歴史と宇宙を生かす水である。それは人間の靈魂にのみ作用する生命の水ではなく、世の全てを生かし豊かにする生命の水である。

## (2) 生命の霊と生命の宣教

モルトマンによれば聖霊は生かす霊である。モルトマンは一九九七年に出版した『生命の泉』で「古くから神の霊は聖なる霊と呼ばれていたのではなく、『生命の御霊』と呼ばれていた」という点を浮き上がらせ、聖霊と生命との関係を強調している。モルトマンによれば真の聖性も、生命への畏れと愛であり、生命のための生のうちにある。復活の霊は生命の霊であり、最後の日に完成すべく復活の生命は今日の世において健康と清純さをもたらす。モルトマンは肉体を虐待して、感覚を死なす行為と聖性とを結びつけた過去の修道院的靈性を正しいものと見ていない。モルトマンによれば聖霊の働きは病者を癒し傷ついた者を癒し、憂鬱と絶望の中に落ちた者たちを慰め、戦争と災難によつて破壊され、死んでいく世界を生かすところにある。モルトマンは次のように言っている。<sup>14)</sup>

創造的で生かす神の霊は、我々の死後に永遠の命をもたらすのではなく、既に地上で死ぬ以前からそれをもたらす。というのは神の霊がこの世界の中にキリストを遣わしているからであり、キリストが人格として現れた「復活の生命」だからである。キリストと共に「破壊されえない生命」が明らかに表れて、キリストをこの世界に遣わした生命の霊は復活の能力になって我々に新しい生命をもたらす。聖霊が遣わされたのは、変わることにない神の命への愛と、聖霊の驚くべき生命への喜びの表れである。イエスがおられるところに命があり、病者たちが癒され、悲しむ者たちが慰められ、捨てられた者たちが受け入れられ、死の悪霊が追い出されると共観福音書は言っている。聖霊が臨在するところに生命があると使徒行伝と使徒たちの手紙は言っている。というのは、ここで死に勝っている命の喜びと永遠の命の力が体験できるからである。

モルトマンによれば聖霊による宣教は生命の宣教である。そして神の国はこの生命の宣教の完成である。モルトマンによれば「聖霊を遣わしたのは変わる事のない神の生命への愛と、聖霊の驚くべき生命への喜びの表れ」<sup>(16)</sup>である。キリストの復活は「破壊されえない生命」<sup>(16)</sup>の啓示であり、キリストを復活させた聖霊は破壊される生命の真ん中で働く破壊されえない生命の力である。こういうわけで聖霊による宣教は破壊されえない生命の宣教であり、生命への愛と生命の喜びに満ちた世を作る宣教である。モルトマンによれば真の宣教は、「慰めと生命の勇気を拡散し、死んでいく者を立ち上げる生命の運動と救いの運動」<sup>(17)</sup>である。モルトマンによればイエスがこの世にもたらしたことは、「新しい宗教ではなく新しい生命」<sup>(18)</sup>である。

このような見方のゆえにモルトマンは伝統的キリスト教宣教が聖霊による生命の宣教を「あまりにも狭く」<sup>(19)</sup>理解したと批判した。モルトマンは次のように言う。<sup>(20)</sup>

無論キリスト的生活様式、教会の交わりと個人的信仰の決断と経験も宣教の一部分である。しかし聖霊の宣教は新しい生命の宣教である。否、それより大きい。一〇〇年前にヴェルテンベルク (Württemberg) のリバイバル運動の説教者であったブルームハルト (Christoph Blumhardt) は我々が「宗教から神の国に、教会から世界に、自分自身に対する心配から全体のための希望に」進むべき道を見出すべきだと強調した。今日これは我々に次のようなことを示唆している。すなわち、我々がどこにいるかが問題ではなく、キリスト教的運命や西欧的価値の拡散の代わりに「生命の文化」を建て「死の野蛮性」に対抗すべきだという事実である。

モルトマンは、宣教を自分の信仰の決断と回心の経験の伝達や、キリスト教的帝国、キリスト教的文明あるいは西欧の宗教的価値の拡散として、または教会の拡張とその増やしと見る狭い思考を捨てて、人間と世を生かそうとする聖霊の活動に参与することを見なすべきであると主張する。神はこの世を愛し、この世の内にある生命を非常に愛しているため、「生命の宣教よりも必要なことはない」<sup>(21)</sup>とモルトマンは言う。モルトマンによれば「暴力と死が生命を脅かすところ、生の勇気が失われて生が委縮したところならば、どこにおいても生命の宣教が始まる」<sup>(22)</sup>。

モルトマンによれば聖霊による生命の宣教は地を新たにし、万物を新しい創造を指向する宣教である。モルトマンによれば「永遠の生命とはこの生と異なるのではなく、この生を変ええる能力」<sup>(23)</sup>である。聖霊はこの世を捨てさせ、あの世の重要性を教える霊ではなく近づいている神の生命の能力として、この世を変化させる霊である。モルトマンによれば将来栄光の神の国で完成するそれが今聖霊においてこの地で始まっている。モルトマンは以下のように言う<sup>(24)</sup>。

今、聖霊において始まっているまさにそれこそが将来栄光の国で完成するようになる。栄光の国は期待から外れて、そしていきなり来るのではなく、霊の国において既に予告され、そこにおいて臨在する力を持つ。

これはまるで春と夏、種まきと刈り取り、日の出と正午のようである。

モルトマンによれば「我々の地に聖霊が降りることを祈る者は天に逃げるとか、彼岸の世界に隠遁しよう<sup>(25)</sup>としない。そしてこの生命の霊の降臨は「すべての肉なる者に注がれる」(ヨエル二・二八、使徒行伝二・一七以下)。このすべての肉体は人間のみを意味するのではなく、「すべての生命体、草と木と動物をも含む」<sup>(26)</sup>とモルトマンは見ている。すなわち、聖霊の溢れている神聖は人間と万物の上に臨んで、世における死の力を追い出し、生命の輝く世を作る。この意味で聖霊は生命の泉であり、聖霊による宣教は生命の宣教である。

### 三、宇宙的靈としての聖靈

モルトマンにとって聖靈は生と生命の靈であると同時に宇宙的靈である。モルトマンの聖靈論は、神と世を極端に对立させたバルト (K. Barth) の弁証法的神学とは大きく対立している。弁証法的神学時代のバルトは、神の靈は世と対立し、世を否定し廃棄させると言う。時間と永遠の質的相違という当時のバルトの神学的観点では、神の靈は世に内住できず、むしろ世を否定し廃棄させる靈であった。モルトマンが聖靈を宇宙的靈と呼ぶときに、その意味はバルトの弁証法的神学とは反対の意味である。すなわち、聖靈は万物の中に存在しており、万物の生と生命の根源として活動している靈という意味である。さらに聖靈は創造世界全体を保持し完成させる靈という意味である。モルトマンによれば聖靈は世の外にあるのではなく世の中に存在しており、人間の靈魂の内にのみいるのでなくすべての肉体の内に存在する。聖靈は宇宙の生命の根源であるだけではなく生命を持続させ維持させる靈であり、同時に宇宙の生命を完成させ、新しい天と新しい地を作る靈である。

モルトマンは世に内住する聖靈の活動に対して聖靈の「ケノーシス」(Kenosis) という用語を用いている。この聖靈の「ケノーシス」という言葉は神がご自身を低くして放浪するイスラエルの民に内住するということを意味する神のシエキナー (Shekinah) と、イエス・キリストがご自身を低くして人間の中に留まり十字架の苦難を経たキリストのケノーシスに相応する用語である。それは、聖靈が呻いて痛んでいる万物に内住しつつ、万物に活気と生命力を吹き入れ、万物を生かし神の栄光の世界を作っていく聖靈の活動を示す言葉である。この聖靈のケノーシスは汎神論 (Pantheism) のための用語ではなく、万物に内住する超越的神のための用語であり、このようなモルトマンの主張す

る神観は一般的に汎在神論 (Pantheism) と呼ばれている<sup>(28)</sup>。汎在神論は被造物と神との間の差異が基本的に前提されているという意味で、汎神論とは違う。

モルトマンによれば神が万物の内に完全におられ、万物が神の内に完全において、万物が神の永遠の生命に参与しつつ、神の栄光が完全に照らされている栄光の世界が聖霊のケノーシスの究極的目的である。この状態はパウロの用語を借りれば「神がすべての者にあつて、すべてとなられる」(1コリント一五・二八)ときであり、モルトマンによればこの究極的完成のために聖霊は万物においておられて、それを生かし、解放させ、救済し完成させる働きを行われる。モルトマンによれば初めの創造は未来の新しい天と新しい地に向けて開かれている創造であった。モルトマンは継続的創造の神学的重要性を強調した。モルトマンの宇宙的聖霊論は宇宙の完成を指向する聖霊論であり、聖霊の活動が万物と深く関連づけられているということを見せている聖霊論であつて、万物の保持だけではなく万物を新たにし完成させることが聖霊の究極的目的だということを見せている。

## II モルトマンの靈性神学

### 一、神経験の場所

神はどこにおいても体験されるであろうか。キリスト教靈性神学においてとても重要な出発点だと見られるこの問いに対して、モルトマンはキリスト教伝統で言及された神体験の場とは相当異なる神学的観点を提示している。アウグス

ティヌス (Augustinus) によれば人間の靈魂が神のかたちである。アウグステイヌスによれば神のかたちである人間の靈魂が神と交わることができる。すなわち、靈魂の奥にて人間は神と出会う。西欧神学で靈性に關する教理の礎を形成したアウグステイヌスの靈性神学の根本的問題点は、彼の靈性神学があまりにも神と靈魂との關係に集中し、肉体と自然の価値を下げ、感覺的世界の重要性を知らないところにある<sup>(20)</sup>。アウグステイヌスによれば感覺の世界に向けた扉はすべて閉めており、ただ神を仰ぐことのできる靈魂の奥の部屋にて人間は神に出会い、神を体験する。人間が世の美しさに耽溺している限り、世の美しさは人間と神との出会いを妨げ、人間の靈魂は安らぎを得ることができない。

このようなアウグステイヌスの靈性神学はそれ以降西欧神学における靈性神学に大きく影響を与えた。すなわち、この影響によつて西欧の多くの靈性神学者たちは靈魂の奥、あるいは、靈魂の頂点において神との出会いの体験ができるという理論を發展させた。ベルナル (Bernhard von Clairvaux) は、自己愛から隣人愛に、隣人愛から神の愛に繋がる、高い段階に昇る靈魂の巡礼に言及し、テレサ (Therese von Avila) は七段階となつている靈魂の城に、そして同じくメルトン (T. Merton) も「七段階の山」(The seven-story mountain) について言及した。人間の内面の奥、すなわち、靈魂の頂点にて神に出会うというこのような思想は、修道院主義と深く結びつくようになり、感覺的で肉体的な世と離別し、靈魂の深い世界に入ることが真の靈性を獲得する道であると人々は信じるようになった。

しかしモルトマンによれば神の靈は解放と自由の靈であり、生命の靈である。イスラエルの民が神を経験した場合は出エジプトの解放の歴史の真ん中であつた。圧制の杖が折れ、不義の杖が切れ、歴史のただ中でイスラエルの民は神を体験した。イエス・キリストと共に働いた神の靈は、盲人の目を開かせ、足の不自由な人を歩かせ、死者を生き返らせる働きを行われた。病者たちは自分の肉体において自分たちを健やかにし、命を満たす神の靈を経験した。モルトマンによれば神の靈は出エジプトで表れたように政治的自由と解放の靈であり、死の勢力から人間と万有を健やかにし生かす命と復活の靈である。神経験はまさにこの自由と解放の靈の経験であり、命と復活の靈の経験である。

モルトマンは、アウグスティヌス以来、神のかたちを人間の靈魂に縮小させた伝統はキリスト教神学がギリシヤ化されたもので間違つたものと見た。モルトマンによれば神のかたちは聖書的理解に従えば肉体を除外した人間個人の靈魂ではない。神のかたちは人間が男と女に創造された（創世記一・二七）ため、男と女としての共同体的交わりにおける全ての人間である<sup>(30)</sup>。モルトマンによれば神は人間の心の奥の秘密の部屋や靈魂の頂点で経験できるのではなく、「男と女の間、そして父母と子女との間にある真の人間の交わりにおいて」<sup>(31)</sup>経験される。「それゆえ神経験の場所は神秘的自己の経験においてではなく、人格的交わりの経験において、社会的自己経験においてである」<sup>(32)</sup>。神を正しく理解するためには肉体から分離した靈魂に再び肉体を被せ、共同体から離脱した個人を再び交わりの中に呼び起こすべきである。モルトマンによれば肉体の靈性なしの靈魂のみの靈性は存在せず、交わりの靈性なしの個々人の孤独の靈性は間違っている。モルトマンは次のように言う。「交わりの神秘なしに靈魂の神秘はありえない」<sup>(33)</sup>。

モルトマンによれば交わりの神秘は人々の間での交わりにのみ該当するのではない。人間は自然との交わりを通して神を経験する。すなわち、愛する人との愛において神を経験するが、同時に自然との出会いにおいても神を経験する。男が女に出会つて真に人間性の神秘を知り、女は男に出会つて人間性の神秘を知る。そして同時に人間は自然との出会いで真の人間となり、神秘の根源である神を経験するようになる。孤独な靈魂が絶壁の頂点で神を経験するのではなく、男と女と自然との交わりの深いところで神を経験するということである。

モルトマンによれば神の靈は生命と生の根源である。憎みと争いと不義と病と死のあるところで人間は、神を経験するのではなくサタンを経験する。強制労働の苦痛において苦しめられたイスラエルの民は不義の鞭が折れるところで神を経験し、病に苦しめられた人々は病が退かれるところで神を経験した。モルトマンによればキリストの復活の福音は、人間を靈魂化させ「靈魂のみを強調し」、靈魂の世界を賛美する世界観とは遠く離れている。復活の靈は肉体と世を捨て靈魂の世界に人間を連れて行く靈ではなく、まだ苦痛と涙と死に満ちているこの世のただ中で苦痛と涙と死を追

い出す力の霊として活動しており、人間を喜びに満ちている世界に参与させ導く霊である。復活の霊は呻いている自然も解放させ、新しい創造の新しい世界に向かわせる霊である。この復活の霊が暗闇の世界を貫いて新しい天と新しい地の夜明けを作る、そこにおいて人間は神の霊を経験し、神を体験する。

## 二、モルトマンの霊性神学の特徴

### (一) 生命「に対する」畏れの神学

モルトマンの霊性神学の最も大きな特徴は霊性 (Spiritualität) を生命力 (Vitalität) と理解しているという点である。<sup>(34)</sup>モルトマンによれば「神の霊、ルアハ・ヤハウエ (ruah jahwe) は被造物の生命力であり、その生命の空間である。この空間において被造物は自分の生を展開できる。生命の力が豊かになることが神の祝福であり、生の喜びを抑圧することが神の祝福ではない」<sup>(35)</sup>。伝統的に霊性は性的欲望を抑圧し、生命の楽しさを否定するところで得られると信じてきた。それゆえ霊性や宗教性や敬虔性などは肉体や感覚とは対立する概念であった。しかしモルトマンは聖霊が肉体を軽蔑する霊ではなく肉体を生かす霊であり、一時的に生かすだけではなく永遠に生かす霊であり、この肉体が命の喜びで満たされるようにする霊である。モルトマンは次のように言う。<sup>(36)</sup>

キリスト教の希望によれば、神の命の霊の暴風の中で全ての創造の最終的な春が始まる。そしてこの霊の力を今体験する人は自分の命がどのように蘇生し、愛が溢れるかを感じる。この霊が全ての肉体の上に注がれ

るときに、病気で衰弱して死滅する体は聖霊の神殿となる。

モルトマンによれば聖霊が生命の根源であるため、真のキリスト教の靈性は生命を愛する靈性である。生命を破壊することはキリスト教靈性の敵であり、受け入れられない犯罪である。モルトマンによれば「生命の畏れは今日、生命に対する暴力の放棄を要求する」<sup>(37)</sup>。戦争と暴力はキリスト教靈性の敵である。戦争と暴力のみがキリスト教靈性の敵ではなく麻薬と喫煙、過度な飲酒及び肉体の健康を害するすべての享樂もキリスト教靈性の敵である。人間の生命を害するすべてのものは聖霊の旨に逆らうもので、キリスト教が指向すべき生命に対する畏れの世界に反するものである。

モルトマンは人間の生命を害するもののみがキリスト教靈性の敵ではなく、自然の生命を害するものもキリスト教靈性の敵と見ている。モルトマンは以下のように言及した。<sup>(38)</sup>

生命の畏れは常に弱い生命、傷つけやすい生命を畏れることと共に始まる。人間世界で生命の畏れは貧しい者、弱い者に該当する。自然世界にて生命の畏れは弱い動物と植物の種に該当する。これらの生命は今、人間の野蛮の行為によって滅びるに至った。生命の聖化は今日の制度化された人間の攻撃から神の被造物を守ることを意味する。

モルトマンによれば神への愛と隣人愛の二重の戒めは今日、さらに一次元拡大すべきである。モルトマンは全ての生命を畏れる次元が必要だと見ている。「生態学的次元を正しく悟ると、今まで口の利けないものと扱われた同伴者、地球に至るまで愛の二重の戒めを拡げることが有益であろう。心と魂と力を尽くして主・神を愛し、あなたの隣人を愛しなさい。そしてこの地球をあなたの体のように愛しなさい」<sup>(39)</sup>。真のキリスト教靈性は弱い動物と植物を守る靈性であり、

自然の生命のために働く霊性である。

## (2) 地と肉体のための霊性

モルトマンによれば神は安息日に経験され、安息の年とヨベルの年において経験される。神の現存する最も聖なる場所は聖書の理解によれば「地のある特別地域や靈魂の内的領域ではなく、安息日と安息の年を経験する時間のリズムの中」<sup>(40)</sup>である。イスラエル宗教の神秘は靈魂の独特な神秘ではなく、「すべて生きている命のための安息日の神秘」<sup>(41)</sup>である。安息の年は貧しい者の負債が免除される年であり、奴隸たちが解放される年であり、土地が休息を得る年である。安息の年を経験するということは、社会的苦痛からの解放を経験することであり、社会的正義を経験することであり、山川草木の緑と生命を経験することである。

モルトマンによればイスラエルの安息の年神学は社会解放的次元だけではなく、生態学的次元をも本質的に持っている。安息日は人間だけが休むのではなく、全ての家畜も休む。安息の年は地の緑と肥沃と命のために制定した年である。モルトマンによれば安息日神学はすべて生きている命のための霊性の根源であると同時に肉体と地のための霊性の根源である。肉体を虐待し、地を捨てることはイスラエルの安息日神学と地のための霊性に根本的に衝突する。安息日に経験される神はすべての命の健康と地に満ちている美しさのために存在したもう神である。

イスラエルの宗教の核心である安息日神学は、すべての肉体と地を生かすための霊性を教えている神学である。安息日と安息の年とヨベルの年に経験する神はすべての社会秩序を正し、世と動物と自然に健康と命を与えようとする神である。今日生態界の死を放置することは安息日の霊性と大きく衝突する。モルトマンは次のように言及する。<sup>(42)</sup>

イスラエルのトラー (Tora) によれば地も神の偉大な安息日に休めるように (レビ記二五章、二六章) 七年ごとに耕してはならない。搾取された地と、今日多すぎる肥料によって汚染される地のためのこの休耕の年にて私は地の靈性を見る。安息し神の前で安息を取り、一年間人間の手を離れて地は息をつき、自分の姿を取り戻し、自分の肥沃を回復する。地は休み自分の平和を楽しむ。これを一回経験した人は、安息の年に地を人間の介入から解放させ彼自身の命を尊重することがどれほど重要なのかを知る。

モルトマンの言う地と肉体のための靈性はプラトン化されているキリスト教靈性の伝統と大きく対立している。しかし地と肉体のための靈性は聖書の安息日神学に基盤を持つている重要なキリスト教の靈性である。モルトマンは以下のように警告している。「もし我々が土地の安息と土地の靈性を拒みつつ土地を搾取するならば、土地は人類のわがままから抜け出すために荒れ果てすべてをなくし、人類は滅亡するであろう<sup>(43)</sup>」。地と人間の間の愛のコイノニアのための靈性が真のキリスト教靈性である。この靈性は地を生かし人間を生かし、命の溢れる豊かな世界を作るであろう。

### (3) 解放の政治的靈性

モルトマンによればイスラエルの民は神を出エジプトの神として経験した。これは十戒の第一戒で、イスラエル宗教で最も強調されたイスラエルの神に対する言及である。「わたしはあなた<sup>(44)</sup>の神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」(出エジプト記二〇・一二)。モルトマンによればイスラエルは神を、エジプトのパロの虐政から彼らを解放させた解放の神と経験した。イスラエルの神はイスラエルの呻きと苦痛と涙をご覧になり、彼らを解放させた、自由と解放の神であつた。「いまイスラエルの人々の叫びがわたしに届いた。わたしはまたエジプト

びとが彼らをしえたげる、そのしえたげを見た。さあ、わたしはあなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」(出エジプト記三・九一—一〇)。過越祭は代々のイスラエルの民のイスラエル民族の神としての経験の根である、この出エジプトの自由と解放の歴史を記念する行事であった。<sup>(44)</sup>

モルトマンによればイスラエル宗教の根は解放と自由の神の経験であり、出エジプトの靈性は政治的解放と自由の靈性である。この靈性は不義の歴史の苦難と圧制を諦め傍観し世を捨てて山に隱遁する靈性ではなく、不義の歴史の苦難と圧制を壊す靈性である。圧制の現実を諦めて、肉の世界を捨てて靈の世界に入る靈性ではなく、肉の世界において存在する不義の構造を打破し正義の流れる世界を作り、乳と蜜の流れる喜びの世界を作る靈性である。出エジプトの靈性は、脱歴史的で靈魂のみ「強調する」靈性を拒否する靈性である。

出エジプトの靈性は解放と自由の靈性である。この解放と自由の靈性は二〇世紀後半の女性神学の靈性とラテン・アメリカの解放神学の靈性と同一靈性を共有している。ベルカー (M. Welker) によれば女性神学と解放神学は、解放する聖靈の活動と深く結びついており、したがって、女性神学と解放神学は聖靈論の一部になろう。聖靈は愛と正義の世界を作る靈であり、圧制から解放させ、公道が水のように正義が川のように流れる (アモス五・二四) 世界を作る靈である。このようなベルカーの聖靈論と靈性神学はモルトマンのそれらと神学的観点において最も類似している。

モルトマンも解放神学を聖靈論の重要な次元と見て、解放神学の靈性も出エジプトの靈性と関係が深いと見ている。したがってモルトマンは、教皇パウロ二世が一九八三年ニカラグア (Nicaragua) で行われた説教で司祭たちはニカラグアの人々の自由、ニカラグア建設と解放のための闘争に参加してはならず、靈性の道の人々に用意させることが司祭たちの課題だと言及したことを強く批判した。<sup>(45)</sup>モルトマンによれば解放神学は聖靈が建てようとする神の国のための神学であり、この国のための歴史的事柄の課題を解決しようとする神学である。<sup>(46)</sup>

一九六四年出版されたモルトマンの『希望の神学』(Theologie der Hoffnung) は出エジプトの靈性を世界に知らせた

不朽の著述であつた。<sup>(47)</sup>この著述はそれ以後登場したメッツ (J. B. Metz) の『世の神学』(Zur Theologie der Welt)<sup>(48)</sup>と共に、二〇世紀後半の全世界に渡つて起きた正義のための闘争、圧制に抵抗する闘争、人種差別と性差別に抵抗する闘争及び民主化のための闘争において霊的な力を供給した著述として、二〇世紀後半に全世界に渡つて起きた巨大な変革の原動力となつた本である。この本の影響でラテン・アメリカではグティエレス (G. Gutierrez) の『解放神学』が一九七一年に台頭し、韓国では維新体制に抵抗した民衆神学が台頭した。

聖書に基づく正しい霊性は歴史から逃げる霊性ではない。不義と圧制が深いところ、また強制労働と鞭と悔しい投獄生活と拷問と死のあるところには悪の霊であるサタンが存在している。聖霊を信じることは強制労働と鞭と悔しい投獄生活と拷問を壊すということを意味し、不義と圧制と死の霊を世界と歴史から追い出すことを意味する。旧約の出エジプトの歴史はまさにこのような歴史において行動する神が啓示された歴史である。それゆえ出エジプトの霊性は、強制労働と鞭と悔しい投獄生活と拷問と死を打ち壊し、不義と圧制と死の力を打ち壊す霊性である。

#### (4) 健康と癒しのための霊性

キリスト教の霊性が健康と深い関係があるということを二〇世紀に顕著に強調した人々は、二〇世紀初めに登場し二〇世紀に全世界に拡げられたペンテコステ運動を主導したペンテコステ主義者たちであつた。ペンテコステ運動 (Pentecostal Movement) によれば聖霊は病を癒す働きを今日も行われる。病気の癒しと健康はペンテコステ主義者たちによれば神の国が歴史の中に入るといふことの象徴である。イエスの神の国の運動はハンセン病、身体障害者、盲人、出血病者など、病者を生かすことから始まつた。今日の神の国運動もやはり病者たちを癒し健やかにする聖霊の活動によつて拡げられる。

ペンテコステ主義者たちによればイエスの十字架の死の中には、貧しさと病のための代理的な死が本質的に存在する。「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」（イザヤ五三・五）。ペンテコステ主義者たちはイエスが打たれた鞭と受けられた苦難によって病に苦しめられた人々が解放され、彼らを痛めつける飢えと貧しさの痛みが解決済みだと信じる。ペンテコステ聖霊運動の靈性は貧しさを信じない靈性であり、病に抵抗する靈性であり、貧しさと病をキリストが解決したため聖霊によって豊かさと健康と命の世界が到来するようになったと信じる靈性である。

このようなペンテコステ主義者たちの靈性に対してモルトマンはまず肯定的立場を示している。モルトマンもやはり病者の癒しはイエスが伝えた神の国の福音の重要な側面と見ている。「それはマルコによる福音書一〇章八節によればイエスの弟子たちに任された働きであり、また教会の使徒性の本質的側面でもあった」<sup>(49)</sup>。モルトマンによれば病者の癒しは「復活と永遠な生命の前兆 (Vorzeichen)<sup>(50)</sup>」である。クリストフ・ブルームハルト (Christoph Blumhardt) はイエスの病者の癒しを「神の国の奇蹟」と表現しているが、モルトマンはこれに肯定的評価を下した。モルトマンによれば「重い病が死の前兆であるように病者の癒しは復活の前兆と理解すべきである」<sup>(51)</sup>。人間は重い病において死の力と辛い闘いをするようになるが、そのため病の癒しは人間の期待と希望となる。モルトマンによれば「病の観点では神の国は病の癒しを意味し、死の観点では神の国が復活を意味する」<sup>(52)</sup>。

神の霊が生かす霊であり、健康と命の霊であり、神の国が健康と生命と生の歴史と結ばれているというモルトマンの見方は、二〇世紀のペンテコステ聖霊運動に対して、とりあえず肯定的に評価できる可能性を提示する。それゆえモルトマンは韓国の汝矣島 (ヨイド) 純福音教会の趙鏞基 (チョ・ヨンギ) 牧師との神学的・牧会的対談で、多くの部分で互いに肯定しつつ、その対談を進めることができた。しかしモルトマンはペンテコステ主義者たちの靈性に対してかなり批判的な見方も持っていて、この批判的見方は彼の本『生命の泉』で明確に記されている。「ペンテコステ主義者たちは政治や平和運動や環境運動のような今日の日常の生のどこに存在しているのか。なぜ彼らは核ミサイルに対抗して

戦っている我々の隣に存在していないのか<sup>(53)</sup>。モルトマンはペンテコステ主義者たちが靈魂の宗教から抜け出て、神の国の福音が全人的な生と健康と生命に関わっているという見方を肯定している。しかし、彼らの靈性が聖靈の社会・歴史的救いの次元を認識せず、個人の祝福と安全の領域に留まっていることに批判している。モルトマンによれば「我々に聖靈の力が来る目的が現実的なこの世界の葛藤から離れて宗教的妄想世界に逃げることにあるのではなく、むしろこの葛藤の真ん中に、自由を得させるキリストの統治を証することに」<sup>(54)</sup>あるため、人間の健康と癒しのための靈性は社会と歴史全体の葛藤と分裂を癒し、健やかな世界を作るための靈性へと拡大すべきである。

### (5) 死に対抗する復活の靈性

モルトマンによれば出エジプトの歴史がイスラエルの靈性の根だとすれば、復活はキリスト教靈性の根である。モルトマンによれば復活の出来事は出エジプトの出来事の意味を包括しつつ宇宙的地平を持っている。この二つの出来事は神が解放の神だということを表している。すなわち、出エジプトの出来事は歴史の独裁者であったパロの暴政での政治的解放を意味し、復活の出来事はあらゆる歴史を踏みこむ暴君である死の力から解放させた出来事となる<sup>(55)</sup>。出エジプトの出来事が乳と蜜の流れる土地の約束の象徴であるならば、復活の出来事は虚無と死の力が除去され、永遠の命に輝く全ての被造物の光栄に満ちた新しい創造の約束の象徴である<sup>(56)</sup>。モルトマンによれば主の靈のおられるところに常に自由(IIコリント三・一七)と解放があり、主の靈の経験は放棄と諦念を拒む希望の経験であり、抑圧を破壊して自由を得るところの自由と解放の経験である。

モルトマンによれば復活の靈は大きく三つの次元の活動と関連がある。その第一は復活の靈が肉体を生かす靈だという点である。モルトマンによれば初代教会が靈魂の不滅を信じると言わず体の復活を信じると告白したのは、重要な意

味を持つている。復活の霊は体を生かす霊である。それゆえ復活を信じるキリスト教の霊性は、体を愛し体の生命のために戦い、究極的に体の復活を信じる霊性である。

第二に、復活の霊はこの世に存在する死の力を打ち壊した霊である。モルトマンによれば十字架は宗教的出来事であると同時に政治的出来事であった。キリストの死はこの世の中に存在するあらゆる苦難の破壊を意味し、復活は死の力の終末を意味する。復活の霊を信じる霊性は政治、経済、社会、軍事、文化のあらゆる領域に存在する死の力に抵抗する霊性であり、この世に生と命を満たそうとする霊性である。

第三に、復活の霊は宇宙的生命のための霊である。モルトマンはエペソ書とコロサイ書、そして聖書の他の箇所には復活の霊の宇宙の意味があると見ている。死の力を打ち壊した復活の霊は全ての被造物を捕らえている死の力に打ち勝った霊である。したがって復活を信じるキリスト教の霊性は、肉体の生命と自然の生命とこの世の生命のために働くべきであり、その中に存在する死の力に抵抗すべきである。

### 三、信仰と希望と愛としての霊性

モルトマンによれば信仰と希望と愛はキリスト教霊性の核心である。信仰と希望と愛の聖霊の経験の三つの次元として、自由を得させる聖霊の活動と深く結びついている。<sup>(57)</sup>モルトマンによれば信仰は人間の全体の生を新たにする自由の始まりである。「信ずる者には、どんな事でもできる」(マルコ九・二三)。信仰は不可能を打ち壊す力であり、死の力の支配するこの世で生の生動的エネルギーが発現する場所である。モルトマンによれば「神の尽くすことのない創造的諸力は信仰を通して人間の内に開かれる」。<sup>(58)</sup>信仰は人間とこの世を結んでいる抑圧と死亡の構造を打ち壊す力である。

出エジプトと復活の神を信じることは抑圧と死の構造において働いている解放の力を信じることであり、歴史の新しい可能性に参加することである。

モルトマンの『希望の神学』は希望の靈性を世に知らせた著述であった。モルトマンはこの『希望の神学』でキリスト教の靈性が彼岸的なものではなくこの世の変革と関連あるものと見て、また挫折と絶望によつて無氣力に落ちて死を愛するのではなく、無氣力と無感情を打ち壊して、迫ってくる神の国の未来に向けて進んでいくと見ている。モルトマンによれば聖靈による宣教は命の宣教であると同時に、この命の溢れている喜びの世界に向けて胸を開く希望を引き起こす宣教である。モルトマンは次のように言及した<sup>(59)</sup>。

もし我々が生命を肯定するならば愛することを習います。そしてもし我々が未来を肯定するならば、希望する法を学びます。……靈魂の無感覺 (Apathie) に対抗して戦うとき、我々は希望の能力を経験するようになります。見通しは暗くても「それでもよろしい」 (Democh) と答えて勇ましく生きるとき、この希望の能力が我々の生を捕まえてくれるという事実を感じるようになります。人類と地球の未来がいくら暗鬱になろうとも、希望するということは生き延びることと生き残ることを意味し、創造された生命のために働き戦うということの意味します。教父クリュソストモス (Chrysostom) は「我々を滅亡に落とすことは罪悪ではなく、むしろ絶望である」と言ったことがあります。「どうでもいい」という冷淡さのゆえに、今日我々は滅亡していきます。

モルトマンによれば冷淡さ、無感覺、自暴自棄などはキリスト教靈性の敵である。それは希望の喪失を意味すると同時に生とこの世を破壊する勢力に対する屈服を意味する。キリスト教靈性は希望の靈性であり、生とこの世を破壊する

力に対する抵抗の靈性である。

モルトマンによればキリスト教の希望は靈魂の内面世界での救いを求める神秘主義的希望に縮小してはならない。新しいキリスト教的靈性は「新しい世界を仰ぐメシア的希望<sup>(60)</sup>」に目を開き未来を仰ぐ希望の靈性である。新しく健やかで完全に生動するメシア的世界に対する情熱は眞のキリスト教の希望の靈性である。

モルトマンによれば眞のキリスト教靈性は信仰と希望の靈性であると同時に愛の靈性である。「眞の靈性は、充満して分離しない生命への愛の回復である。生命に対する完全な肯定とあらゆる生命体に対する差別なしの愛は聖靈の初めての経験である<sup>(61)</sup>。ブルンジ (Burundi) とボスニア (Bosnia) で起きた大量虐殺に対する無関心な靈性は眞のキリスト教靈性ではない。モルトマンによれば「生命の靈性はこのような内面的麻痺、心の無関心の鎧と他人の苦痛に対する冷静さを打ち壊す<sup>(62)</sup>」靈性である。それは命の死に対して泣き、生命の再生に対して踊る靈性であり、「自分の中にある死への衝動と、自分を巻きこんでいる死の諸力に抵抗し、命ある未来のために戦う<sup>(63)</sup>」靈性である。

また眞の愛の靈性は支配のための靈性ではなく、交わり (Gemeinschaft) のための靈性である。モルトマンは自由を支配と理解している政治の歴史を批判した<sup>(64)</sup>。自由を支配と理解するようになった背景には、僕には自由がなく、支配した者が自由を持った歴史のゆえである。しかし聖靈による眞の自由は「交わりとしての自由」(Freiheit als Gemeinschaft)<sup>(65)</sup>である。人間の眞の解放は主従関係においてではなく、自由の人格体の中で愛の出会いにおいて遂げられる。男と女との間の愛と交わりと隣人との愛の交わり及び民族と民族との間での愛と交わりと、そして人間と自然との愛の交わりの中で、さらに人間と神との愛と交わりの中で人間らしさを味わい、人間に不安を与え抑圧する全てのことから解放される<sup>(66)</sup>。第一世界が第三世界を抑圧する構造は第三世界の人々の生命を奪うことだけではなく、彼らの抵抗と対抗の暴力によって第一世界の人々の生命も危うくしかねない。したがって眞の愛の靈性は支配と服従の悪魔的構造に対抗せざるを得ない。モルトマンによれば支配と服従を意味する「主権としての自由は生を破壊させる<sup>(67)</sup>」。眞のキリ

スト教靈性は御父と御子と聖靈の愛のコイノニアに相応する自由な人格体たちの間の出会いと交わりの世界を指向する愛の靈性である。この愛の靈性は世界における分裂と葛藤を癒し戦争をなくし、キリストの愛が花を咲くような美しい世界を作るであろう。

### III 結び

モルトマンの靈性神学は統全的神学の特徴を持つ靈性神学である<sup>(68)</sup>。それは過去の靈性神学が靈魂の中に沈みつつ入つたのに反して、肉体と感覚の重要性を明らかにし、明るい世界の美しさを感じる感覚的經驗の中にも神の經驗の大道が存在することを教えた靈性神学である。そしてそれは教会と修道院の塀の中が神を經驗する独占的場所ではなく、この世と歴史の中で、そしてすべての被造物の解放と喜びの中で神が經驗されるということを知らせる靈性神学である。

またモルトマンの靈性神学はこの世の生と生命のための靈性神学である。世を離れて宗教的で靈的な世界に逃げることは正しいキリスト教の靈性ではなく、この世の中にある死の勢力に対抗することが正しいキリスト教の靈性であり、人間と世と自然を生かし、生命の喜びで全世界が溢れるように作ることが正しいキリスト教靈性神学だということを教えた靈性神学である。モルトマンの靈性神学はかつての靈性神学が持っていた歪んだ脱社会性や脱歴史性という問題点を矯正し、二一世紀のための正しい靈性神学の道を開いたという点で大きな価値を持っている。

## 原注

- (1) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens* (München: Kaiser, 1991). [訳注：この本の訳書が日本では『いのちの御霊』、韓国では『생명의靈』(生命の靈)』という題で出版されている。したがって原文の「생명의(生命)」は、ここで「いのち」あるいは、「生命」と混用する。『いのちの御霊』の副題は日本語では「総体的聖靈論」となっている】。
- (2) J. Moltmann, *Die Quelle des Lebens* (München: Kaiser, 1997).
- (3) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.21.
- (4) Y. Congar, *Der Heilige Geist* (Freiburg: Herder, 1982).
- (5) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.21.
- (6) Ibid., p.9. [訳注：本文は韓国語の原文から訳したものである。参考のために、以下の長い引用文に対しては和訳を注において紹介しよう。「とどのつまりいつあなたは『聖霊』の働きを感じたかという簡単な問いは、私たちが当惑させる。聖霊の『神聖』が、私たちの中に宗教的畏怖を呼び起こす。私たちは、聖霊が世俗的生活から隔たっていることと人間が神から遠いことを感じる。周知のように、宗教的体験はみんなの中心となる事柄ではない。とどのつまりいつあなたは『生の御霊』を感じたかという問いは、全く異質に響く。ここで私たちは、自分自身の日常生活経験によって答え、そして経験した慰めと励ましについて語ることができる。そうすると御霊は、私たちが歓喜させる喜びである。霊の力は、霊が私たちの内に呼び起こす生の力である」。蓮見和男・沖野政弘訳『いのちの御霊』新教出版社、一九九四年、一頁(以下、「蓮見和男訳」と略記)】。
- (7) Ibid.
- (8) Ibid., p.107.
- (9) Ibid., p.190.

(10) モルトマンによれば福音伝道のために死んだ伝統的形態の殉教者もいる。ロメロ (A. Romero) 大司教やキング (M. L. King Jr.) 牧師や神学者ボンヘッファーらは他の形態の殉教者たちであり、彼らは皆神の国のための殉教者である。

(11) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.193. 「訳注、『聖霊』は、生を聖別する霊である。創造者の被造物の生にたいする情熱をもって、生を破壊しようとするすべての力に対する怒りをもって、聖霊は生を聖別する。破滅の縁において、創造の維持と生への再生は非常に融合しているので、聖別する霊は生かす霊として経験される」。蓮見和男訳、二二六頁。

(12) *Ibid.*, pp.208-9. 「訳注、『カリスマ的经验において、神の霊は生気を与えるエネルギーとして経験される。生は、喜ばせる神の近くにおいて振動し始める。私たちは、私たち自身を、神の力の場の振動の中で経験する。それゆえカリスマはまた、力 (dynamics) あるいは活力 (energia) と呼ばれる。聖霊がカリスマ的に経験される仕方は、昔から『流れ』、『注ぎ』、『輝き』として描写される。この経験から推し量るならば、聖霊は『生の源』、エネルギーの流れの『根源』、光り輝くための『光線』として現われる。ここに見出される表現は、発出論を指示している」。蓮見和男訳、二九二頁。

(13) J. Moltmann, *Die Quelle des Lebens*, 이신전환, 『생명의 샘』(서울: 기독교서회, 二〇〇〇年)、七七頁「李シンゴン訳、『いのちの泉』(ソウル: 基督教書会)。以下、「李シンゴン訳」と略記」。

「訳注、和訳は以下のものがある。蓮見幸恵訳『いのちの泉——聖霊といのちの神学』新教出版社、一九九九年(以下、「蓮見訳」と略記)。韓国語訳と日本語の訳は用語の扱いなどが異なっている。本論文の著者の思想を尊重するために、引用文は韓国語を基にしている。しかし、長い引用に関しては、注に日本語の訳文を添付する」。

(14) *Ibid.*, p.34. 「訳注、『創造的で生き生きとさせる神のみ霊は、この永遠に生きるいのちを、死の後にはじめてもたらすのではなく、死の前に、すでにここに、もたらして下さるのです。なぜなら、神のみ霊は、キリストをこの世界にもたらし、キリストは、そのご人格において、『甦りであり、いのち』だからです。キリストと共に、『朽ちないいのち』が明らかになり、そして、キリストがこの世界に送るいのちのみ霊は、私たちに新しいいのちをもたらし復活の力なのです。聖霊の派遣は、神の何ものをもつても打ちこわすことのできない生の肯定と、神の驚くべき生の歓喜の啓示です。イエスがいますところ、そこに、いのちがあり、そこで病める者は癒され、悲しめる者は慰められ、疎外されている者は受け入れられ、死の悪霊が追い出されると、共観福音書は語っています。聖霊が現臨するところ、そこに、いのちがあると、使徒

行伝と使徒たちの書簡は語っています。なぜなら、そこには、死に対するいのちの勝利の喜びがあり、そこにおいて、永遠のいのちの力が経験されるからです」。蓮見訳、三八―三九頁」。

(15) Ibid.

(16) Ibid.

(17) Ibid.

(18) Ibid.

(19) Ibid.

(20) Ibid. 「訳注、「確かに、キリスト教的ライフスタイル、教会の交わり、また個人の信仰の経験や決断は、これに属していません。しかし、聖霊の宣教は、新しいいのちの宣教、また、これ以上のものです。私たちは、ヴェルテンブルクの目ざめた説教者クルストフ・ブルムハルトが百年前に語ったように、『宗教から神の国へ、教会から世界へ、個人的な私についての関心から全体の希望』への道を、見出さなければなりません。私たちが、キリスト教文化や西欧世界の価値の拡大の代わり、宇宙的な『いのちの文化』をうち建て、……いつも私たちがいる場所で、『死の残虐行為』に抵抗することが、今日、私たちにとって意味をもっているのです。蓮見訳、三九―四〇頁」。

(21) Ibid., p.36.

(22) Ibid., p.37-8.

(23) Ibid., p.38.

(24) Ibid., p.24. 「訳注、「聖霊におこす、」ここで始まることが、かの栄光のみ国において完成します。栄光のみ国は、だしぬけに、備えなしに来るのではなく、聖霊の領域においてすでに予告され、このお方において、その現臨は、力あるものとなつていゝのです。これは、春と夏、種まきと収穫のようであり、また、日の出と真昼のようなのです。蓮見訳、二七頁」。

(25) Ibid., 25.

(26) Ibid.

(27) 弁証法的神学の時代のバルトの神の霊と世との関係を理解するためには筆者の本『현대의 도전과 오늘날의 조직신학』(서울: 장신대출판부, 一九九七年) 「『現代の挑戦と今日の組織神学』(ソウル:長老会神学大学校出版部) の第一〇章「カール・

バルトの『ローマ書講解』と自由神学との決別」を参照されたい]。

(28) モルトマンの汎在神論については以下の論文を参照されたい。Oksu Shin, *The Panentheistic Vision in the Theology of J. Moltmann, Dissertation to Fuller Theological Seminary* (Pasadena: 2002).

(29) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.103.

(30) *Ibid.*, p.106.

(31) *Ibid.*

(32) *Ibid.*

(33) *Ibid.*

(34) J. Moltmann 『いのちの泉』、四七頁(李シンゴン訳)。

(35) *Ibid.*, p.98.

(36) *Ibid.* [訳注、「キリスト教的希望によれば、神のいのちのみ霊の暴風の中で、全被造世界の窮極的な春が始って、全被造物は、その霊の力を、すでに、ここで経験し、彼らの生が再び生き生きとなり、いかに愛すべきものとなるかを、感ずるのです」。蓮見訳、一一七—一八頁]。

(37) *Ibid.*, p.73.

(38) *Ibid.*, p.72. [訳注、「いのちに対する畏敬は、つねに、より弱く、傷つきやすい生に対する尊敬と共に始まります。これは、人間の世界における貧しい者たち、病める人びと、抵抗する力のない人びとに当てはまります。これは、自然の世界における動物のより弱い種に、当てはまります。これらのいのちは、現在、人間の野蛮な行為によって、死に絶える運命にあります。聖化は、今日、制度化する人間の不当な攻撃に対して、神の被造物を保護することを意味しています」。蓮見訳、八五頁]。

(39) *Ibid.*

(40) *Ibid.*, p.108.

(41) *Ibid.*, p.109.

(42) *Ibid.*, p.114. [訳注、「イスラエルの律法によれば、『地が、主のために大なる安息を祝うことができるために』(レビ二五、

二六章)、大地もまた、七年目ごとに、耕さないままにしておかなければなりません。尊敬され、また、今日ひじょうに多くの肥料によって毒された大地に対する、このような自由の年に、私は、大地の靈性を見るのです。休息する大地、神がその安息を祝われ、この年人間によって触れられない大地は、ほつとひと息ついて、自分に立ち帰り、再び、豊かな実を結ぶようになります。土地は休息して、その安息を楽しむのです。このことをひと度経験した者は、安息年に、大地を人間の追跡から解放し、それ自身の生を尊重することが、どんなに大事かということを知るのです。蓮見訳、一三六頁]。

- (43) Ibid., p.115
- (44) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.112.
- (45) Ibid., 124.
- (46) Ibid., 123.
- (47) J. Moltmann, *Theologie der Hoffnung* (München: Kaiser, 1964).
- (48) [訳注、原文にはTheologie zur Welt und nicht um sie]。メッツ (J. B. Metz) の『世の神学』は一九六八年に出版された。しかしこの本はモルトマンの『希望の神学』の影響が感じられる本として、『希望の神学』のカトリック神学的発展と見ることができるとある。[訳注、田淵文男訳『世の神学』、あかし書房、一九七〇年を参照されたい]。
- (49) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.202.
- (50) Ibid.
- (51) Ibid., p.203.
- (52) Ibid.
- (53) J. Moltmann 『いのちの泉』、八七頁 (李シンゴン訳)。
- (54) Ibid.
- (55) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.202.
- (56) Ibid.
- (57) Ibid., p.127.
- (58) Ibid., p.128.

(59) J. Moltmann 『いのちの泉』、五九一六〇頁。「訳注、「私たちは、生に対して然りと言うなら、私たちは、希望を学びます。そのように私たちは、将来に対して然りと言う時、私たちは、臨むことを学ぶのです。……私たちは、自分たちの心の無感動に対して戦わなければならない時、私たちは希望の力を学ぶのです。私たちが、見通しが悪い時でも、『それでもなお』と言つていのちを賭けるなら、希望が私たちの生を支えることを感じるのである。また、人間と地球の将来が暗いように見える時でも——臨むことは、生き、そして生きぬくこと、また、被造物のいのちのために、働き、戦うことを意味しているのです。『私たちの罪が、私たちを不幸の中に陥れるのではなく、むしろ、絶望こそが、私たちを不幸に陥れる』と、すでに、教会教父のクリソストモスは語っています。今日、私たちは、自分たちの無関心のために、駄目になっているのです」。蓮見訳、六八一六九頁。なお、引用箇所における教父の名は『キリスト教人名辞典』によれば、「クリュソストモス」となる。『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、一九八六年、四九二頁」。

(60) *Ibid.*, p.60.

(61) *Ibid.*, p.115.

(62) *Ibid.*

(63) *Ibid.*, p.116.

(64) J. Moltmann, *Der Geist des Lebens*, p.130.

(65) *Ibid.*

(66) *Ibid.*, p.131.

(67) *Ibid.*, p.132.

(68) 統全的靈性神学の研究のために次のものを参照されたい。金明容「統全的靈性神学」『キリスト教学術院フォーラム』第四号(ソウル:キリスト教学術院、二〇〇二)、一七五—一九二頁。